

不能奈何、相傳書呪歌粘其柱、則蠶悉除去、屢試驗焉、其歌未知誰人所詠、

(重修本草綱目啓蒙二十七)蟲○中

附錄白蟻、ハアリ。和名、ハ子アリ。尾州、ハリ州、勢州、河州、フアリ。豫州、ケガレバ。イ土州、ドク。

ドウシ。薩州、ドクヅシ。同上、イツトキバイ。防州、ウンゾウ。バイ。筑前

增、白蟻、一名飛蟻、爾雅、翹蟻、事物、註、雅

此蟲ハ朽木、或ハ水ニ近ヅキ、常ニ濕ヘル柱杙中ニ自生シ、木ヲ喰、中ヲ空クシ、數ナクソノ内ニ往来連行ス、蟻ノ形狀ニシテ色白ク、未ダ羽ヲ生ゼズ、コレヲドウトヲシ筑前ト云フ、春暖ノ候ニ至レバ羽化シテ出飛ブコト甚多シ、遠ク望メバ烟ノ如シ、ソノ羽ハ四片ニシテ、身ヨリ長シ、身ハ淡赤黒色ニシテ光アリ、其飛ブコト高キコト能ハズシテ地ニ下リ、即翼ヲ脱シテ地上ヲ行ク、長サ四五分ナルモアリ、三才圖會ニ飛亦不能高尋則脱藉、藉在地而死ト云フ、然レドモ急ニハ死セズ、地中ニ入ル、多クハ虎蟻ニ食ハル、

(三代實錄光孝十)仁和三年八月四日乙巳、地震五度、是日達智門上有氣如煙非煙如虹非虹、飛上屬天、或人見之皆曰、是羽蟻也、時人云、古今未有如此之異、陰陽寮占曰、當有大風洪水失火等之災焉、八日己酉、有羽蟻出大藏正藏院、群飛竟天、屬于船岳、

(扶桑略記二十二)寛平元年十月、大臣云、一日安然法師云、近來在雲林院人云、蟲蠶々发出、看之其虫所竟、東至園池司、西至絹笠岡、北至紫野、即羽蟻也、

(日本紀略二朱雀)天慶七年七月廿日庚寅、羽蟻集北野、其勢滿野、

(日本紀略五冷泉)安和元年四月三日乙卯、已刻御在所麗景殿與淑景舍間、羽蟻飛如雲、又敷政門外陽明門等又如此、

(日本紀略十一條)長德四年四月八日丙申、左近陣北掖羽蟻出來、